

一九九七年

竹林の整理

竹林の枯竹集め火放てば快音たてて爆ぜ燃え上がる

枯れし竹爆ぜて燃えつつ丈余なる熱き火炎となりて果てけり

竹燃えて身の丈もある火炎立つ一時の間に尽きて鎮まる

朽ちて地を肥やすもよきよ一瞬の炎ととなりて照らすもよきかな

捨ておけば朽ち土に帰す枯れ竹の秘めし力は我を圧せり

三たび目の鹿兒島の春も駆け抜けむ我に暫しの孤独を与えよ

只管に旅への思ひ募る日よ黙して小さき草の芽を摘む

石蠟でお河童の子を犬走りに書いては消しぬし幼き日ふと

霜置ける畑の青菜の健気さよ覗けば二寸の花芽伸びぬて

霜解けの露朝の日に輝きてマーガレットの苗根づきぬる

球根の芽の不揃いにやわやわと陽注ぎぬる独りの午後かな

今宵また遠来の客夫にあり天下国家の酔論楽しむ

終電を気にせず飲める気安さに夫の酔論今宵も果てなし

老いてなほ性変わらずよ見栄っぱり友の論理は昔ながらに

我とともに根付きたるらししだれ桃奢りの春の枝々の紅

身のほどに余れる数の大輪の椿は降り落つさみどりの上

メチユーサの髪の如き葉うねらせて美少女ムスカリ青く群れ咲く

三たび目の春のチユリップは小振りにて律儀に真紅の花咲かむとす

雑草とは誰が名付けしや白青黄小さき花の群れの可憐さ

寒さにもめげぬ五色のヒヤシンス春一番に咲きつつ伸びゆく
開きつつ伸びゆく五色のヒヤシンス花の先より枯れゆく哀れ

佐多岬行

九州の果ての果てたる佐多岬を目指すは卯月雨上がりの朝
道路図を片手に見れば窓外は新緑まばゆき大隅の道
南北に海分かちたる溶岩の魁偉に生ふる木々不屈なる
最果ての佐多の岬はうらうらと水平線も春霞に消ゆ
南の最果ての岬に歌碑ありて同じき海を見し人偲びつ
断崖の伊佐敷洞門抜き行けば春蕩の海の入り日眩しも

茅葺門

歴史ある茅葺門の改修とはめ込まれたる楠板すがし
黙々と一人板打つこの匠還暦過ぎての円熟の技

鶏鳴を現に聞きつつ今日といふ日の明けたるを知るのどけさ

囚われの目白の一羽籠にあり目白籠てふ籠の小さき

やすやすと囿の籠に囚われし目白の世界は靴箱ほどなり

流亮な啼きを時折響かせて小さき目白は左右に飛び交ふ

啼き声の流亮たるが災いよ目白は軒の籠に囚わる

右ひだり休む間もなくとまり木を行き交ふ目白よ健やかにあれ

三たび目の鹿兒島の春も駆け足に行くか我に暫しの孤独与えよ

余震の日々

今までの地震は余震か予震なるや賚の河原の如き石垣
間断なく地震見舞ひの電話ありいつか喜劇の如く語りある
今の震度3ならむかとテレビ点けテロップを待ちある余震の日々よ
パソコンの終了急ぐ地震ありてマウスを握る手も震へあるなり
電源の不意に落ちなばパソコンは一巻の終りぞ頼む切れるな
パソコンの終了手続き完了に地震も治まる皮肉も嬉しき
再開は麻雀なりき顔寄せてマウスカチカチ暫しの没我

春の口

祖母逝きし齡を五年も過ぎし我その心根には遠く及ばず
幼き日若き父母の見つめたる未来の夢を砕きし戦争
石蠟でお河童の子を犬走りに書いては消しぬし幼き日ふと
霜置ける畑の青菜の健気さよ覗けば二寸の花芽伸びぬて
微かなる予感もありし権勢の極みにありし人の蹟き
我とともに根付きたるらししだれ桃奢りの春の枝々の紅
身のほどに余れる数の大輪の椿は降り落つさみどりの上
メチユサの髪 of 如き葉うねらせて美少女ムスカリ青く群れ咲く
三たび目の春のチュリップは小振りにて律儀にも真紅の花咲かむと
雑草とは誰が名付けしや白青黄小さき花の群れの可憐さ
寒さにもめげぬ五色のヒヤシンス春一番に咲きつつ伸びゆく
開きつつ伸びゆく五色のヒヤシンス花の先より枯れゆく哀れ

イギリス旅行回顧

横文字の小包届くイギリスの旅で出逢ひし彼の地の女より
もどかしく包み開けばイギリスの四季の草花の写真集なり
添えられしペン字の手紙は一年の息災と孫の成長告げたり
Once a yearの七年恒例となる我等の文通

美しきペン字の主と出会ひたるイギリスの旅そぞろ思ほゆ
トランクはロンドンのホテルリョック背に勇んで夫と汽車に乗りし日
エジンバラ、ネス湖、スカイ島、スコットランド、グラスゴーよりは
を指向す

プリマスは夜行列車の終点地キャブテンクックの軍港の町
プリマスよりペンザンスまでの汽車旅は海岸線を西へと走る

孫二人連れし質素な老夫婦樂しげに孫と戯れぬたり

銀髪の妻は語り汽車好きな孫達のための宛なき乗車と
髪薄きケルトのかつての水兵の腕に旧き刺青のあり

東洋の我等の顔を口開けて二人の幼子見つめぬたりし

記念にとカメラ向くれば恥ぢらひて見上ぐ栗色の髪の幼子
日本より写真送ると告げしかばかの妻紙片にアドレスを書く

引き返す彼らが降りし旧き町大教会陽を浴びて立つ
老夫婦孫と四人が手を振れり異国の駅にて受くる見送り
送りたる写真のお礼と様々な小物届けり忘れたる頃

祖母の読む絵本覗きぬし幼子はテレビゲームに夢中なりとかや
昨夏はポルトガルにて過ごせしといつか薩摩の地に迎へたし

ウ干ルズをまた訪へと文は言ふ我は薩摩にいつか迎へむ

心の傷

深き傷胸底に秘め只管に針見つめつつ青き糸編む

胸の傷に膜生れたるや夫の帽子孫の帽子と編み継ぐ間に

口惜しきをただ只管に編み込めば長さ余れり青きマフラー

長女にて我はありせば長き日を亡父亡母支え来たりしものを

我が胸を刺せる刃は弟妹にあれば黙せり誰にも告げ得ず

弟妹の我刺す傷に黙すのみ糸を編む手しばし休めず

キャナルシティ

開店を待ち佇めば玄界の朝風冷たきキャナルシティ

キャナルシティ屋上に出て見下ろせば「中州」一望川は淀みて

「中州」とは中州なることを納得すキャナルシティの朝の眺望

眼下には「中州」に懸かる赤き橋朝の光にうらぶれてあり

人の世と歡樂苦界の通い路の名残り留めし小さき赤橋

世界一のショッピング街か棚のごと店の並べるキャナルシティ

大陸の窓の博多のエネルギーよ群衆溢るるキャナルシティに

人造の美は崩るとも新しく建て続けなむ新鋭の博多

本を胸に少し口開け午睡する初老の夫の静かな小春日

暖冬

暖かき冬の目覚めは雨を告ぐ車のあぐる水しぶきの音

暖冬に早やばや咲きし大輪の白き山茶花崩れ散り敷く

暖かき雨上がりの朝は風もなく師走なれども春の気配す

明日こそは寒カラムとは思ひつゝも空のままなる石油ストーヴ
山茶花の身も細るらむびつりと花の付きゐて暖かき冬
垣根もと紅敷き詰めて山茶花のいよよ艶けし雨の霽に
庭隅に白き蒲公英、山董ちらほら咲ける師走といふに

一九九八年

雪と懐旧

湧き湧きて舞ひ降る雪を仰ぎつとほく果てなき思ひ出綴る日
めくるめく雪見上ぐれば薄光の空につつらふありし日のよう
ゴム長にスキーを履きてパタパタと弟の我を追ひし日もあり
眼の前に転びて雪を払ひつゝ高松宮は我に笑ませり
屋上に一人雪空仰ぎつゝ前途を夢見し高校生の日よ
背を丸め小股に雪道踏みしめて出社したるも十年の昔
大雪に帰途を案じしその日より十年経たるも首都は変はず

友病むと

大輪の白薔薇と紛ひし君病むと東風よな吹きそ友な散らしそ
病む舅看取らむと異郷の伊勢の地に下りし君が病得むとは
萌え出る草の緑に赤々と散り敷く椿に病む君重ねつ
暖かくなりたれば共に薩摩にと呟く君が背の声弱し
あと四月と伝へ聞けるを知らぬげに薩摩にて会むと約すも虚し
ヨセミテの夏を我らに案内すと語りしは君よゆめな忘れそ

春曉独り

独り起きて炬燵点ければいつしかに夜気はゆるみて冬去ぬを知る
日の出には未だ一刻もある闇に何告げむとや鶏啼き続く
呼応する鶏もありてか幾度も声のかぎりを振り絞り啼く
鶏鳴の途切れししじまも束の間に重き響きのトラックの行く
愛猫のいつしか脇に寄り添ひて夢想の我をふと呼び戻す
ワンピースを開きて読めばよしもなきこととも思ふ昨夜の眩き

屋久島

巨大なる山塊の海に浸かりゐて顎波洗ふ如き屋久島
朽ちし木の幼き命を育てつつ屋久島は抱く悠久の時
太古より果てなく落つる大滝に緑溢るる屋久の島かな
木の精の染むる緑の清流の山より落ちれば直に海か

青風

大仕事終へたる後の放心を青風なぶる雨上がりの午後
雨止みて露光りたる我が庭は溢るる緑の命の謳歌
目を閉じて肌に味はふ合歡の木の子揺すり来る五月の風を
やすやすと育ちたる合歡鷹揚に腕広げ立つ庭主のこと
五年目の夏に初めて蓄持ちし姫娑羅をふと青風撫で過ぐ

渋谷氏下向七五〇年

かりそめの縁にあらずと高らかに師は詠じたり渋谷氏の集ひに
高らかに詠ずるに値ふ歌一首残したしと思ふ歌誌を眺めゐて

豪雨の日々

目覚むれば雨音しげし今日もまた豪雨の予報当たりたるなり
袋懸けし二十ばかりの庭の桃なべて朽ちたり長雨の中
古き井戸近寄りがてに露草の濡れて群れ咲くサファイアの青
満々と赤き濁流湛へたる川内川を横目に走る
溢れなむ濁流になほ雨しげき川内川は不敵にも緩し
雨暫し上がれば空のやや明く山峡の靄の動き素早し
濡れ濡れて滴る緑を縫ふ山の舗道をしづき上げ走り抜く

比叡山

晴れたれば湖も都も眼下ならむ霧濃き五月の雨の叡山
法燈を受け継ぎ給へる師の式に招かれてある我の幸せ
絢爛の僧の装列先導にお座主の輿はゆるゆる進めり
祭りにはあらし式なり観衆のなき装列は厳かに行く
中堂に読経の声の満ち満ちて伝燈相承式に我座す
伝統の千二百年の響きかな根本中堂の読経の声

瀬田の唐橋

形のみ同じになしてふ名ばかりのコンクリートの瀬田の唐橋
百足住みし三上山とはただの塚藤太の社は対岸にありき
龍のごと目を剥く百足に矢をつがふ俵藤太の挿絵思ひつ

雨のドライブ

街道に紫陽花の叢浮かびて去にし日の旅ふと思ひ出づ

全戦没者慰霊祭

亡父建てし赤寺包む霧晴れず冷氣身に沁む文月の朝
神迎への長き法螺の音深々と霧の堂宇に流れ沁み入る
謂はれなく戦に果てし御魂祀る玉串に籠めぬ父の思ひを
敵味方全ての御魂安かれと慰霊の祭りを続け来し父
父の思ひ受け遙々と高齢の天台のお座主来駕まします
天地に伏して捧げむ我が涙父の名もなき寺にお座主あり
梅雨時雨冷氣漲る山中の堂に満ち満ち誦経の声
遺志継ぎし僧形の息も式衆の一員たるよ父見そなはせ
父の遺志を継ぎ尽くさむとする我に続く弟妹なきぞ悲しき
母立ちし寺の厨に我立てばいつしか母と同じき身ごなし
母亡くて七年を経し厨なれば傷み剥落流しも流れず
応援は友と二人の義妹のみ母ありし頃の賑はひはなく
口癖に父の願ひし昭和寺祭努めるは長女われのみなるとは
父母と亡き妹の心込めし堂宇の厨ぞと思ひ新たに
「料亭の女将にはなれぬ」と親友は家事の苦手な我をからかふ

笠沙の岬

見下ろせば笠沙の岬はエメラルド底まで透ける碧き汀よ
「神つ代の笠沙」と茂吉の碑のありてこの果てまでも来し人偲ぶ
夏の日碧き汀に白き波人影のなき岬眩しも

擦れ違ふ車も譲る崖上の笠沙の岬の細き道かな

崖上の九十九折りなる細道にバス停のあり笠沙の岬

吹上浜

緩やかに視界の果てまで弧を描く白砂に寄せる波音もなし

戯れる子一人なき白浜の続くかなたに野間岳の浮かぶ

振り向けば連なる白砂を見下ろして金峰山は臥牛の如し

北薩遍歴

行く夏の錆色の山の峰々の旗指し物に賑し日偲ぶ

馬のあとを追ひ駆け走る足軽の喘ぎ覚ゆる砂熱き道

苔生せる古き小さき墓五つ訪ひて偲ぶ戦いの日々

道脇に集め置かれし古き墓幾星霜を黙して語らず

四度も攻め落さざりける岩田ヶ城失なひし人に代ふべきなからむ

亡父亡母の見守り給ふ縁かや娘の希ひてし道開け行く

入来峠

ハンドルを握る手固し初めての入来峠の螺旋を下る日

前に行く車は無けれど後ろより追はるる如く峠登れり

我が思考ふとさまよふをいくたびか戒め戒めハンドルを握る

チュ・リップの花びら風に揺れ崩る名残の婀娜を陽にしなだれて
山はまだ芽吹きも気配の木々の間をほの白く刷く山桜花

雨

降りしきる薩摩の山路を故郷の味噌を求めて町へと走る
ワイパ・の速度を上げて雷鳴を後ろに聞きつつ山路を急ぐ
人気なき山路嬉しも思い切り飛沫を上げて走る梅雨の日
雷鳴は背後の山かワイパ・の速度を上げてカ・ブ切るなり
大粒の水滴はじくワイパ・の速きリズムは私の鼓動か
雨音を聞きつつ心安らげり今日も老後の怠惰の日ならむ
雨続きの庭を覆へる雑草に焦り覚えしは過ぎし日のこと
どくだみの花の白さの浮かびる霧雨の日は亡き人偲ばむ
クリッククリックとマウス転がし雨の日はしばしゲームに憂き世をクリア
クリッククリックとマウス転がせばカラフルな画面開けて憂き世はクリア

性善に忍耐強き亡父なりき子の背信を如何に見るらむ
庭

窓に舞ふ揚羽蝶汝は山椒の若葉食いぬし翡翠の虫か
植え付けし山紅葉の花飛び立たず命の力は未だ満たざり
びじりと葉裏に並びし毛虫らは厚き葉を食む共同作業と
許せ毛虫椿も大事とスプレ・を掛くればはらはら糸ひきて落つ
舞ふ揚羽汝は山椒の柔き葉を食へ尽くしぬし翡翠の虫か

三十株の菖蒲を賜びていそいと植えたる朝は梅雨もうれしも

一九九八年 七月提出用

国見ヶ丘に立ちて

神々の見下ろし給ひし岡に立てば緑鎮まる四方の山なみ
悠久の時の流れに黙しつ四季のつらひ纏ひ立つ
四方の山從へ臨む神の丘天地の軸に吾も立ち佇つ
青赤の薨もあれどこの村は神ながらの里神ながらの山
神々の伝へ俄に懐かしと思へる日向の丘の夕暮れ
緑なす山辺に霞む阿蘇の岳遙かな空に胸広げ立つ

八月

天草のドライブ

白銀の婿のワゴン車天草の鄙びの岸辺を縫ひ行く夏の日
夫なればはらはらとする運転の婿なればなど心安けき
九十九折りの道より覗けば碧き海輝く緑の谷に連なる
手つかずの自然のかくも懐かしき天草の入江の山よ緑よ
島人の素朴な色のみ天草の入江の浜に子ら泳ぎゐる
ロザリオの鎖の白き玉かとも天草の入江の古き天主堂
天草に骨埋めしてふ異国の師うべなひ眺む島と海とを
雲仙の淡きその影原城の悲劇も霞める海の静けさ
夕刻の帰りの車の渋滞の都会なみなる夏の天草

一九九八年 九月提出用

台風上を行く

果てしなき雪原のごと眼下には夕陽に映ゆる台風の雲

輝ける雲厚ければ地上には豪雨伴ふ暗雲たるらむ

雲海の上を絹雲軽やかに地上の風をよそに浮かべり

ネガとポジ動と静とを台風の空行く機上にまざまざと覚ゆ

鯖雲を切り雨雲を抜け下りれば志布志の浜の曲線の見ゆ

一九九八年 十月提出用

風蕭々

蕭々と薄撫で行く朝風に雲一つなき八重のゴルフ場

蕭々と風吹き行けば一斉に白銀きらめく穂薄の群

なだらかな芝の緑を吹き抜ける風蕭々と肌に冷たし

次々と連れ立ち行けるプレーヤーに風蕭々と語らふ如し


風向きを薄穂の揺れに確かめてクラブ構えるゴルフプレーヤー

丈ほども育てる枇杷の漸くに花つけたるらし四年目の秋

十一月

秋の椎葉村

山奥の落人の里秘境なりと聞きし椎葉に旅人の群れ



山越えの難所も今やトンネルの五分で抜けて椎葉に至る
重なる椎葉の山の胸の辺に姫の屋形あり秋の陽の中
山壁にそと抱かれし日溜まりの椎葉の里に柿赤く映ゆ
谷間より陽射し求めて伸び来たる檜の巨木は日本一なりと
御神木那須大八植えしてふ杉の大木すくと天指す